2026年11月1日

説教題『沈められ、起こされて』ローマの信徒への手紙６章3～11節

主任牧師　加藤　誠

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるためにバプテスマを受けたわたしたちが皆、その死にあずかるバプテスマを受けたことを。」（ローマ6章3節）

先週の主日は恵泉教会に送り出してくださってありがとうございました。大井教会の第二礼拝では、加藤修三さんが説教に立ってくださいましたが、ご自身の信仰を正直に見つめ、聖書を深く掘り下げて、向かい合われていく、その真摯な姿勢に深く教えられました。その説教を通して私たちは「イエス・キリストを信じるとはどういうことか？」という大切な問いを受け取りましたし、また、ちょうど合同学習会で「バプテスマの学び」が重ねられていますので、これから何回かにわたって「バプテスマって？」という問いのもと、聖書に聴いていきたいと思っています。

修三さんは中学１年生でバプテスマを受けられて、バプテスマ前よりも受けた後にいろいろな問いを持つようになったと語られていました。わたしの場合は小学校２年生の冬にバプテスマを受けましたが、思春期に入るやいなや、聖書に対しても信仰に対しても疑問だらけ。神が七日間で天地を創造された話をほんとうにみんな信じているのか不思議で仕方ありませんでしたし、「クリスチャンにならずに死んだ人は救われない」という教えにも「キリストに会えずに死んだ人は世界にたくさんいる。そんな馬鹿なことがあるか！」と猛反発しました。クリスチャンであることはどこか恥ずかしく、友だちにも隠している情けない信仰でした。牧師の家庭に育ち、日曜日は教会に行くしか他に選択肢がない環境の中で受けたバプテスマに意味があるのか悩みましたが、しかし親から強制されたわけではなく、自分から「バプテスマを受けたい」と言った、あの時の決心を否定することはできない。自分で信仰告白してバプテスマを受けたことがわたしの信仰のつっかえ棒になっていました。ただ大学の時に「これからもクリスチャンを続けるか、それとも辞めるのか」の結論を自分で出さなければいけないと考えていた時に、フランスのラルシュ共同体という「障がい」をもった人と「健常者」が一緒に生きる生活共同体で半年間を過ごす機会を与えられたのは幸いでした。そのラルシュで、わたしはイエス・キリストの信仰が人を生かす力であり、人と人をつなげて一緒に生かす力であることを体験したからです。障がいを持った仲間が「イエスは俺の友だちなんだ！」と喜びにあふれて、自分に与えられた命を堂々と生きている姿はまぶしく見えました。社会では「障がい」はマイナスと烙印を押される現実が多い中で、ラルシュの人々が、各人の尊厳を大切にし、個性を受け入れ合う努力を惜しまない姿を見た時に、この世界で、違いを持ったお互いが一緒に生きることを可能にするのはイエス・キリストの愛であることをはっきり示されたのです。聖書には依然として分からないこと、疑問に思うことはたくさんあるけれど、イエス・キリストの愛の確かさは変わらない。自分もこの愛を受け取り、この愛を土台にして生きたい。クリスチャンとして生きていく腹がはっきりと決まったのでした。

もう一つ、わたしの信仰の歩みに深く刻まれている恵みの出来事は、就職した後、ある出来事を通して自分の罪を深く示され、魂の奥底まで見抜いておられる神さまの前にとても立つことができない、礼拝堂に入る資格が自分にはないと示されたことがありました。しかし、聖書を開いているときに、黙って十字架につけられているキリストが示されました。ひと言も語られませんでしたが、神の前にとても立ちえない君のために、君の罪をすべて受けるためにわたしは来た。教会の礼拝堂には君のための席が用意されている…という主イエスの招きを聴いたように思いました。この出来事を通して、わたしはこの十字架の主を離れては歩めない自分を示されたのでした。

このわたしの小さな経験と、今朝のローマ 6 章を重ねる時、バプテスマは「主イエスと共に歩む信仰のはじめの一歩」であり、「試行錯誤を重ねるわたしの信仰の歩みを大きく包む恵みの出来事だ」だと、わたしは受け取ります。

バプテスマは「主イエスと共に歩む信仰のはじめの一歩」です。十字架で神の愛と赦しをあらわし、わたしの罪をすべて受けてくださった主イエスが「わたしに従いなさい」と招いてくださり、その招きに「はい」と応えることです。聖書の信仰は「主イエスと共に歩む信仰」だからです。わたしは、自分一人の力でこの世界を生きることができない。迷ってばかり、失敗し、つまづいてばかり。すぐ神さまのことが分からなくなる、見えなくなる、頼りない不信仰な自分。そのわたしに「一緒に歩もう！」と招いてくださる主イエスに「よろしくお願いします！」と応えて、ついていくこと。それが聖書からいただく信仰です。主イエスはわたしの罪を死なれました。そして、復活の命に招き入れてくださいました。「だから、わたしも主イエスと共に死に、主イエスと共に復活の命に起こされていきたい！」。「バプテスマ」とは「沈められる」こと。３節「キリストに結ばれてバプテスマを受けたあなたがたは」とありますが、原文には「結ばれて」という言葉はありません。原文は「キリストに沈められたあなたがたは」。「キリストの恵みの中に、キリストの命の中に、キリストの愛の中に、沈められる」「埋め込まれ、取り囲まれて生きる」。それが「バプテスマ」です。ですからバプテスマを受けた者はもう「独り」ではない。キリストの中に生かされ、キリストと共に歩む者とされたからです。

ただクリスチャンになってからも、わたしの求道生活は続きます。主イエスが一緒に歩んでくださっても分からないことだらけ。聖書も読めば読むほど疑問がわいてくる。そして世界のことを考えれば考えるほど「なぜこんなに悲しみや苦しみがあるのか。いったい神が用意されている救いとはどういう救いなのか」。疑問がつきません。けれども、その試行錯誤を続ける、私たちの信仰生活、求道生活を、バプテスマの恵みは大きく包み込みます。なぜなら、十字架に死なれて、神によって起こされて、復活の命をあらわされた主イエスの恵みは、私たちの罪と不信仰を大きく包む恵みだからです。私たちが、どんなに不信仰でも、主イエスの愛と恵みはびくともしない。ゆるがないからです。その主イエスの愛と恵みの中に沈められたバプテスマは、私たちの試行錯誤の歩みを大きな恵みの中に包み込む出来事なのです。この大きな恵みの中を、キリストに沈められ、起こされながら、歩んでいきたいのです。